

山形県川西町
下小松墳丘群鷹待場支群

K-86/

第 105・106・186 号墳調査報告書



1987

川西町教育委員会

序

昨年度発掘調査を実施しました61・64号墳を、本年度町単事業で復元し、貴重な文化財として保存と活用を図ってまいります。

県内初めてといわれています埋蔵文化財資料展示館が竣工以来仮オープンしておりましたが、昨年11月に正式に開館いたしました。道伝遺跡、天神森古墳等、町内から出土した文化財を展示し、竣工以来町内は勿論、県内、県外から3,000人余の方々が来館されておられます。

また、900余名の会員を擁する川西町文化財保護協会の活動など、町民の文化財に対するご理解とご協力に、衷心より敬意と感謝を申し上げるものであります。

本年度は、下小松墳丘群発掘調査の第2年次にあたり、鷹待場支群（前回までの報告書では、中間支群と呼んでいたもの）105,106,186号墳の発掘調査を、国庫補助を得て実施したところであります。

本報告書は、その発掘調査の概要をまとめたものであり、調査に際しては県教育庁文化課明治大学教授大塚初重先生、県考古学会副会長加藤稔先生はじめ、関係各位の懇切丁寧なご指導を受け調査を行ったものであります。

調査の結果、天神森古墳と同様、古墳時代前期の古墳であることが判明いたしました。

下小松墳丘群の調査は、置賜地方の古墳文化を研究するうえで、新たな資料の提供となり、本報告書がその面の解明に少しでも役立ち、また、文化財に対するご理解を一層深めていただく一助となれば幸甚と存ずるものであります。

最後になりましたが、本調査の実施並びに報告書作成に当って、ご指導、ご支援賜りました関係各位に心から深甚なる謝意を表すものであります。

昭和62年3月

川西町教育委員会

教育長 金子兵司

目 次

序

目 次

調査要項・例言

※ 本 文

I 遺跡の概要	1
II 調査の概要	2
III 調査の成果	4
IV まとめ	9
1 古墳の形態・規模 2 築造年代 3 結語	

※ 挿 図

第1図 下小松墳丘群位置図	1
第2図 第105・106・186号墳各調査区	3
第3図 第106号墳墓主体部調査区	5
第4図 出土土器実側図	5
第5図 各調査区土層断面図	6～7

※ 写真図版

図版1 下小松墳丘群遠景・第106号墳周濠調査前状況・第106号墳現地説明会風景	
図版2 第106号墳 墓壙確認・遺物出土状況	
図版3 第186号墳 L・M・N調査区	

※ 付 図

付図1 下小松墳丘群鷹待場支群105・106号墳	
付図2 下小松墳丘群鷹待場支群186号墳	

調 査 要 項

1. 遺 跡 名 下小松墳丘群・鷹待場支群 105・106・186 号墳
2. 所 在 地 山形県東置賜郡川西町下小松字舞台山 1933-33~34 字薬師沢 1938-1
3. 調 査 期 間 昭和 61 年 5 月 19 日～同年 9 月 18 日
4. 調 査 主 体 川西町教育委員会
5. 調 査 総 括 平 賀 梢 一（社会教育課長）
6. 調 査 主 任 藤 田 宥 宣（文化財専門員）
7. 調 査 補 助 員 月 山 隆 弘
8. 特 別 調 査 員 柏 倉 亮 吉（県考古学会会長）
大 塚 初 重（明治大学教授）
加 藤 稔（県考古学会副会長）
9. 調 査 協 力 県教育庁文化課・町文化財保護協会・大道工務店
10. 調 査 参 加 者 藤倉徳夫・高橋啓一・黒沢利一・高橋宏平・鈴木仙助
11. 調 査 指 導 県教育庁文化課
12. 地 権 者 石田隆一・横山憲一・鈴木三右衛門・鳥貫盛雄
13. 用 地 協 力 横山武幸・平田忠雄・平田英雄
14. 事 務 局 佐藤 肇（文化遺跡係長）

例 言

1. 本書は、川西町教育委員会が、昭和 61 年度に実施した、鷹待場支群 105・106・186 号墳の発掘調査報告書である。
2. 挿図縮尺は、それぞれにスケールを示した。
3. 土色は、「標準土色帖」農林省農水産技術会議事務局監修を活用した。
4. 本報告書の執筆は藤田。編集は藤田・月山が担当し、遺物実測トレースは月山がおこなった。
5. 本調査にあたっては、県教育庁文化課・町文化財保護協会・大道工務店をはじめ、地権者並びに各関係機関の御協力を賜りましたことを記して感謝申し上げます。



第1図 下小松墳丘群位置図

I 遺跡の概要

下小松墳丘群は、米沢盆地北西の丘陵地帯に位置する。丘陵の標高は約270～280 mで、尾根の南東側に多くの墳丘が築造されている。

この丘陵の裾野には多くの遺跡があり、中でも昭和54年より発掘調査を行った道伝遺跡（置賜郡衙と推定）等もあるところである。下小松山には、昔より200～300基の墳丘があるといわれ、古墳群と呼ばれていた。しかし、発掘調査を行っていないことから、中世の塚との見方もされていたものである。

昭和58年教育委員会が、遺跡詳細分布確認調査を行った際、前方後円墳の墳丘を15基発見し、この墳丘の性格が問題となっていたものであり、この性格及び築造年代等の問題を解明する必要から三カ年の計画をたて、緊急発掘確認調査を行ったもので、今年度が、その第2年度にあたる。

墳丘の造られた位置から5つの支群に分け、立地する南側から、尼ガ沢支群・小森山支群・鷹待場支群（中間支群）・薬師沢支群・永松寺支群と称している。第1年度にあたる昭和60年度には、小森山支群第61・64号墳の発掘調査を行い出土遺物から、古墳時代中期の古墳であることが確認された。今年度はその北側の鷹待場支群105・106・186号墳を調査したものである。

Ⅱ 調査の概要

今回の調査は、昨年度の小森山支群につづき、鷹待場支群（中間支群）の性格及び築造年代等の基礎資料を得るためのものである。鷹待場支群には、昭和58年度の遺跡詳細分布確認調査における踏査で31基の墳丘を確認することができた。墳形は詳細な調査を行わなければ、土盛りされた土の崩れ等より正確におさえることは出来ないものであるが、現在のところ方墳14基、円墳17基の支群である。

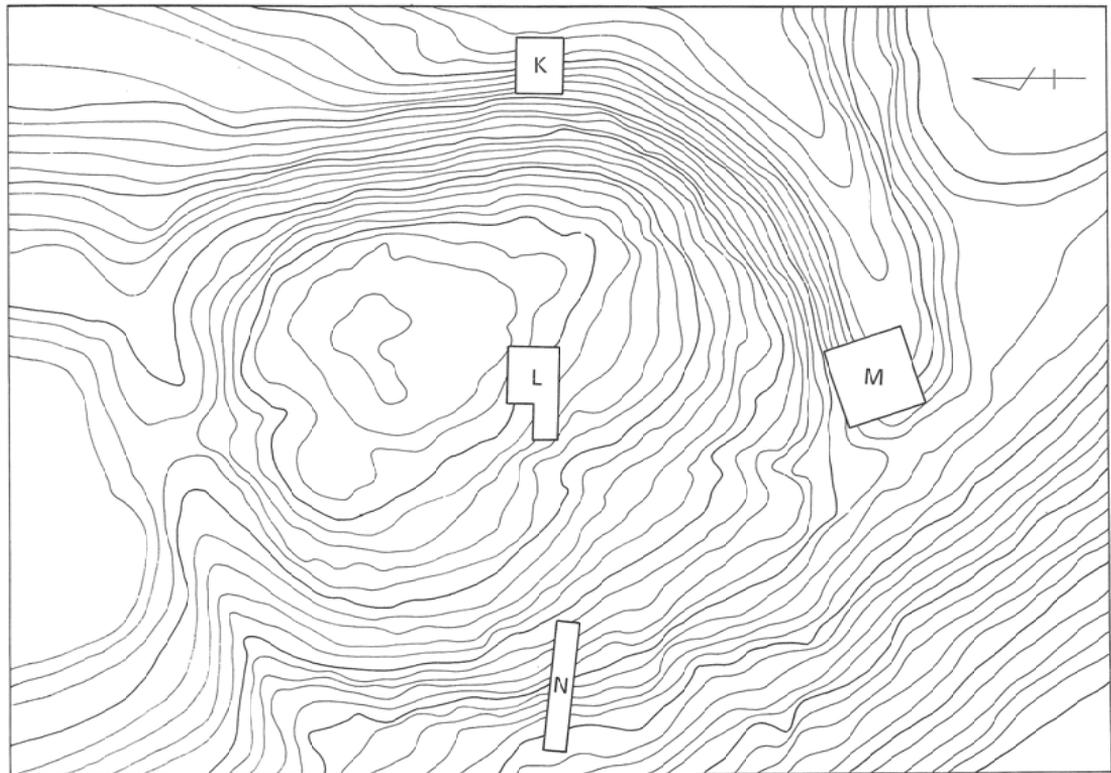
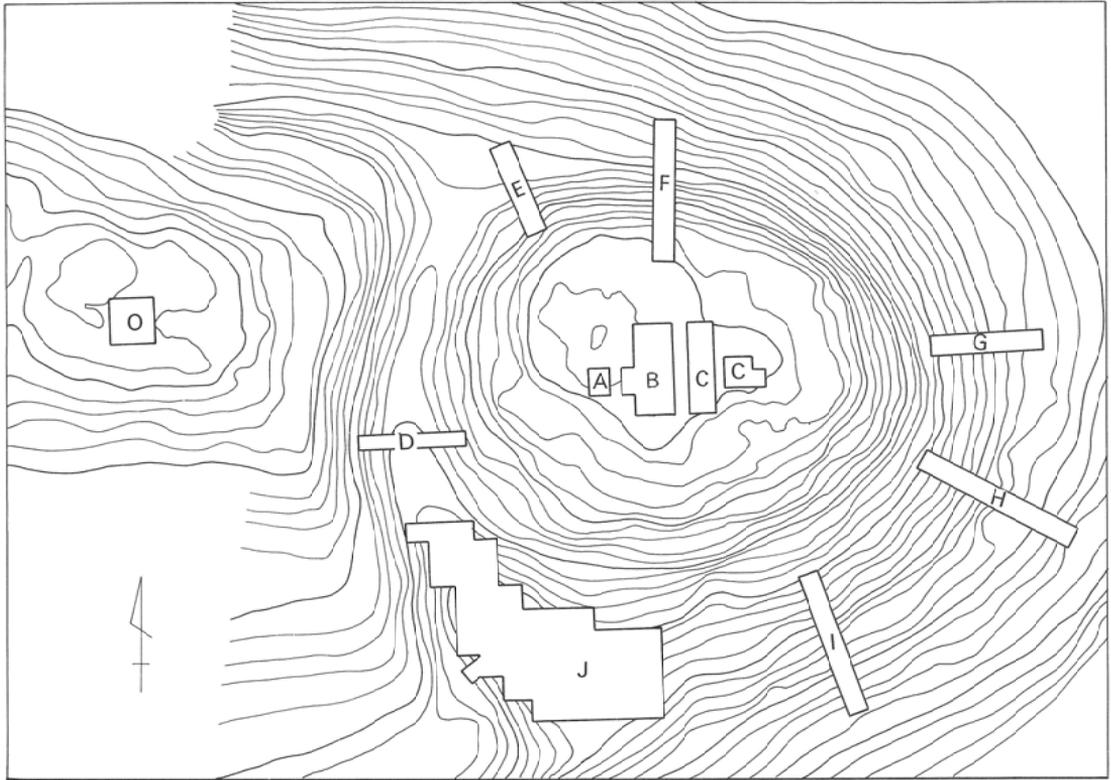
調査を行なった105・106・186号墳は、墳丘近くまで道路があることと、支群のなかで規模も大きく円と方の形や、土橋が明瞭に残るものであることから調査を行なった。

106号墳は円墳、105・186号墳は方墳との考えで調査を行なったものである。

調査区は、松茸を多く採取できる場所であり、また、墳丘の保存等も考え発掘調査面積は、できるだけ狭くおさえざるを得なかった。調査は、遺構プラン、遺物の確認、墳丘の規模、形態を確認することをねらいとしたもので、調査面積は約2,250㎡であり、発掘調査区は、124,46㎡である。

調査期間は、雑木伐採、埋め戻し、機材整理等を含め5月19日より9月18日まで行なった。調査経過は、日誌を集約し報告するものである。

5月19日～20日	106号墳作業路雑木伐採・地鎮祭鍬入れ式準備	8月1日～8日	186号墳各調査区掘り下げ・図面整理・現地説明会用資料作成・遺物検出R P 51
5月21日	地鎮祭鍬入れ式（参加者19名）	8月9日	現地説明会60名参加・調査指導委員加藤稔氏視察・指導
5月22日～29日	105・106・186号墳調査区内立ち木伐採	8月11日～13日	186号墳調査区掘り下げ・遺物検出R P 52～54
5月30日・31日	発掘調査資料準備・整理	8月16日～19日	遺物整理・調査区、面整理
6月3日～17日	105・106号墳調査杭打ち・平板測量・写真撮影 トレンチ掘り・図面整理	8月21日～22日	調査指導委員大塚初重氏現地視察・指導
6月18日～7月5日	186号墳調査杭打ち・平板測量・図面整理	8月23日～30日	105・106号墳実測・埋め戻し作業
7月7日～23日	106号墳中央部掘り下げ・墓壇確認・遺物検出R P 1～3	9月1日～5日	186号墳調査区掘り下げ・遺物検出R P 61～63
7月24日～31日	106号墳周濠部掘り下げ・土層断面実測遺物検出R P 4～14	9月11日～18日	発掘機材整理・洗浄修理



第2図 第105・106・186号墳各調査区

Ⅲ 調査の成果

各調査区の概要

a, 106号墳

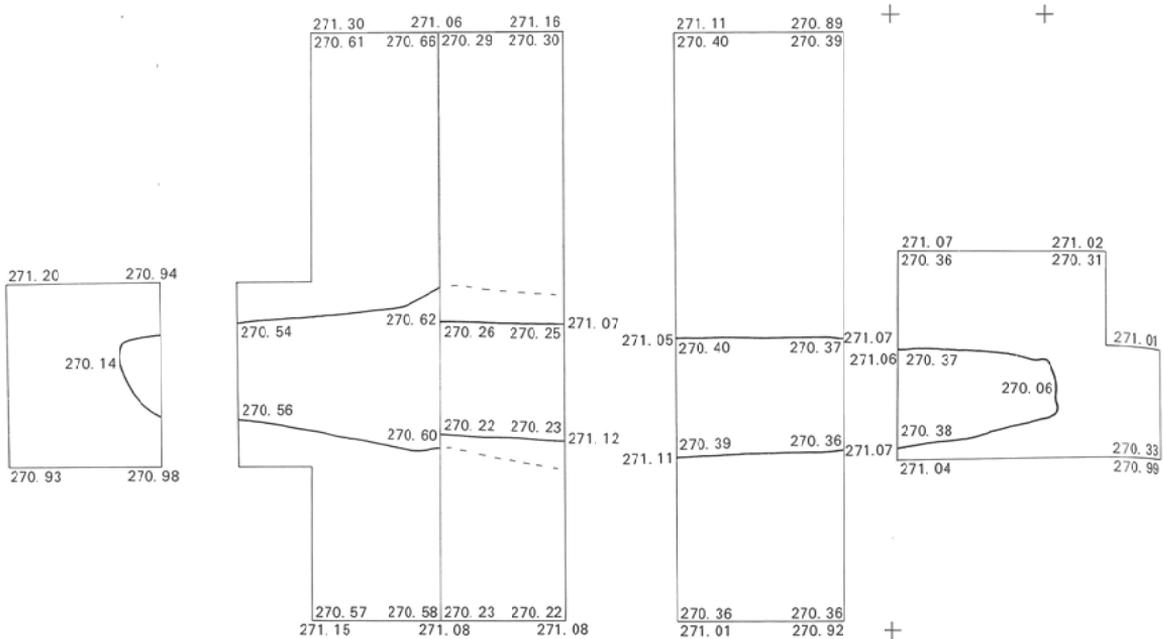
A～C調査区 第2・3・5図

106号墳墳頂に、墓壙確認のため設定した調査区である。墓壙の有無を確認するためほぼ中央部に巾2m長さ4mのトレンチ掘りを行なった。墳丘表土下10cmで土壙プランを確認、墳丘表土下25cmで須恵器片・土師器片(RP1・2)を検出した。この土壙状プランは、後に判明する墓壙の上面にできたものであった。巾2mのトレンチを巾1mづつ交互に少しづつ掘り下げを行ない表土下85cmで、墓壙プランを確認することができた。墓壙プランの巾は、墳丘表土下85cmで75cmの巾をもつものであった。ボーリング棒での探査では、墳丘表土下1m7cmで墓壙の最深部である。墓壙断面は、U字状を示すことから割竹形木棺直葬と考えている。墓壙プランの長さを確認するため東西に調査区を拡張した。この調査区においては、墳丘表土下72cmで墓壙プランをおさえることができた。墓壙の長さは、表土下72cmで6m20cmとなる。墓壙確認面でおさえ墓壙の掘り下げを行なわないことから、墓壙内の遺物は、検出していない。

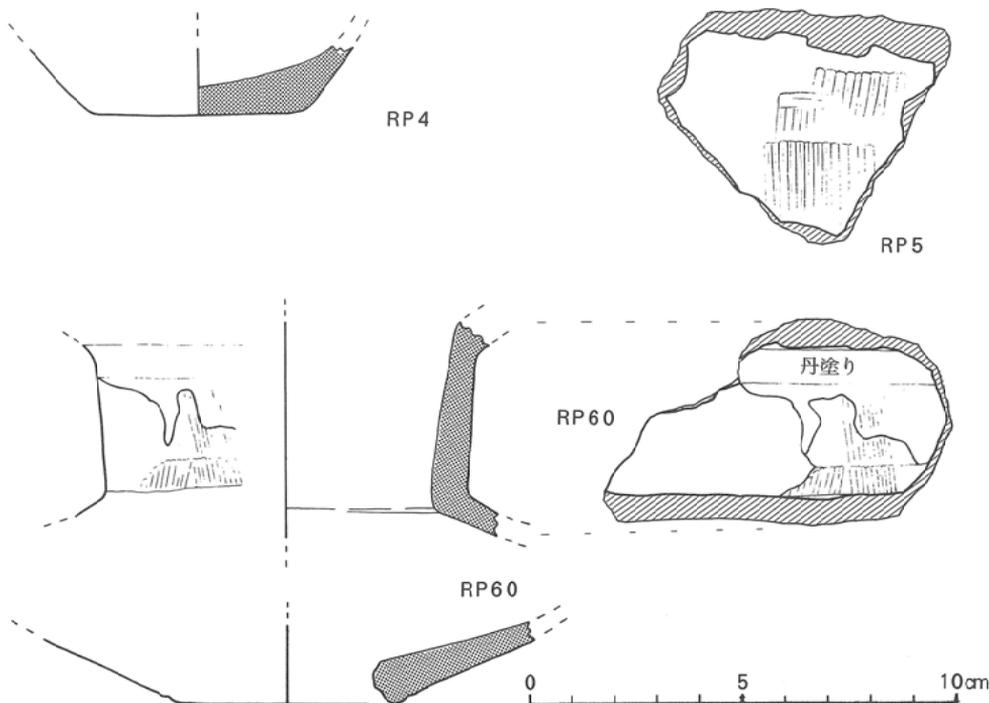
D～J調査区 第2・5図版

106号墳周濠及び墳麓線をおさえることを主眼し設定した調査区である。E～I区は、30～40cmの掘り下げを行ない、墳麓と考えられる墳丘築造時の傾斜角度の変更するところから土師器片が各調査区より検出し、このところを古墳の墳麓線としておさえている。しかし、J区の掘り下げは、表土下15cmであり、周濠プランは検出していない。D区は、周濠の土層断面を調査するため設定したものである。周濠最深部で覆土の厚さ85cm、巾は、周濠の立ち上がりの線の傾斜角度から、1m70cmとしておく。

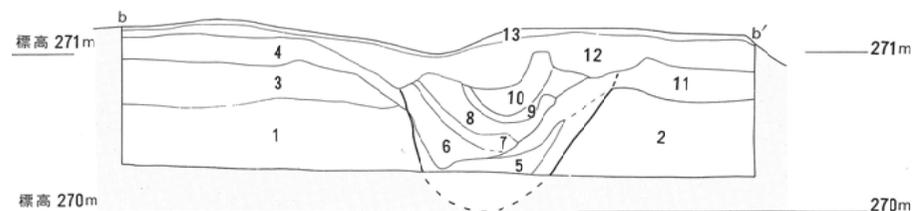
土師器片は、各調査区の墳麓部より検出することができた。RP4は、H区より表土下25cmで検出した。底径5.1cmの平底で磨滅が著しい、内面調整は、不明であるが、外面には刷毛目痕が若干みられる。RP5～8は、I区の表土下20cmで検出したものである。器厚は、8mmほどあり同一器の破片と考えている。内外面とも磨滅が著しく刷毛目痕は見られない。胎土に砂粒を含むもので、破片より大型の器種と考えている。RP9～14と確認しているが、すべて墳丘表土下20cmの出土で刷毛目等がみられる。しかし、すべて破片状のものである。



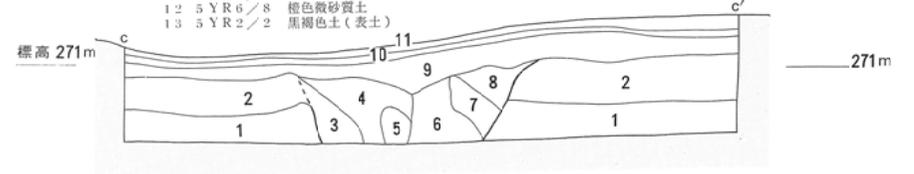
第3図 第106号主体部調査区図
墓壙プラン確認



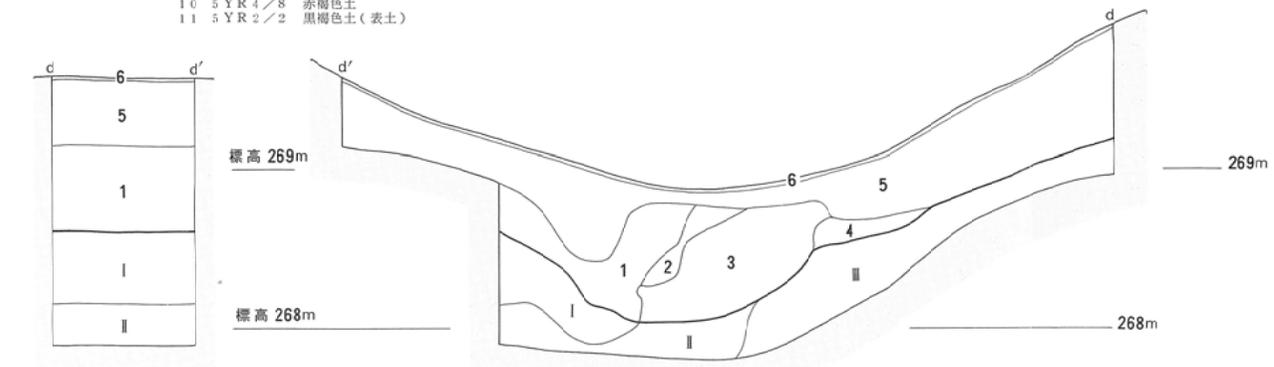
第4図 出土土器実測図



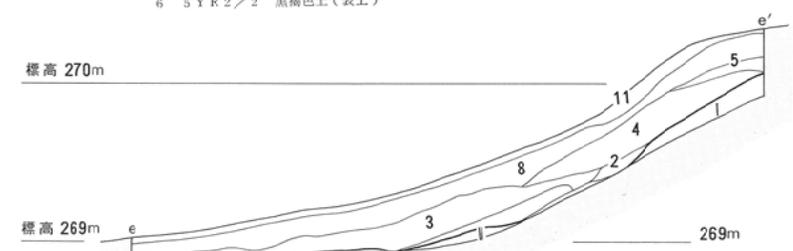
- 106号墳B調査区
- 1 5 YR 6/6 褐色砂質土
 - 2 7.5 YR 5/6 明褐色土
 - 3 5 YR 6/6 褐色砂質土(1よりわずかに荒い砂混入)
 - 4 5 YR 1/6 赤褐色土(暗)
 - 5 5 YR 5/6 明赤褐色微砂質土に7.5 YR 8/2 灰白色土5%混入
 - 6 5 YR 5/8 明赤褐色微砂質土
 - 7 5 YR 5/8 明赤褐色微砂質土
 - 8 7.5 YR 6/8 褐色土
 - 9 5 YR 6/8 褐色土
 - 10 7.5 YR 5/8 明褐色土
 - 11 5 YR 5/8 明赤褐色粘質土
 - 12 5 YR 6/8 褐色砂質土
 - 13 5 YR 2/2 黒褐色土(表土)



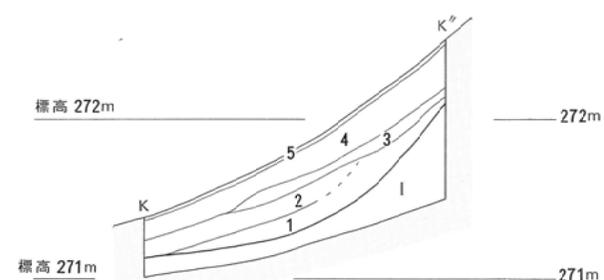
- 106号墳C調査区
- 1 5 YR 6/8 褐色砂質土
 - 2 5 YR 5/8 明褐色微砂質土
 - 3 7.5 YR 5/8 明褐色微砂質土
 - 4 5 YR 1/8 赤褐色粘質土
 - 5 5 YR 5/1 明赤褐色粘質土
 - 6 7.5 YR 4/6 褐色土(大粒の炭素混入)
 - 7 5 YR 8/3 淡黄色土に7.5 YR 5/8 明褐色土混入
 - 8 7.5 YR 6/8 褐色土
 - 9 5 YR 4/6 赤褐色土(明)
 - 10 5 YR 4/8 赤褐色土
 - 11 5 YR 2/2 黒褐色土(表土)



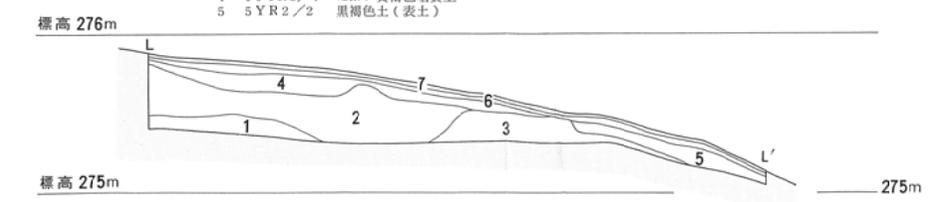
- 105号墳D調査区
- I 2.5 YR 5/8 明赤褐色土に2.5 YR 8/1 灰白色粘質土霜降り状に混入(旧表土)
 - II 2.5 YR 8/1 灰白色粘質土(旧表土)
 - III 10 YR 6/8 明黄褐色微砂質土(旧表土)
 - 1 5 YR 5/8 明赤褐色土(石英混入)
 - 2 2.5 Y 5/6 黄褐色粘質土
 - 3 2.5 Y 8/1 灰白色粘質土に2.5 YR 5/8 明赤褐色土混入
 - 4 5 YR 5/8 明赤褐色土
 - 5 10 YR 4/4 褐色土
 - 6 5 YR 2/2 黒褐色土(表土)



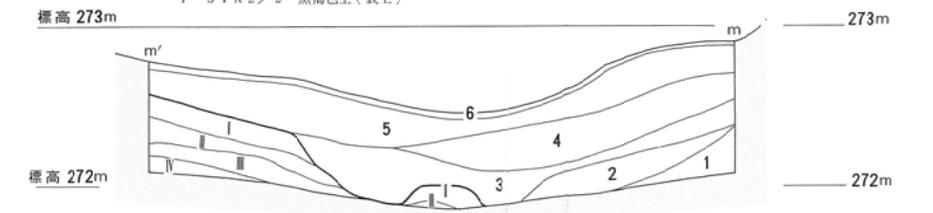
- 106号墳E調査区
- I 5 YR 4/6 赤褐色粘質土(旧表土)
 - II 7.5 YR 5/6 明褐色粘質土に腐れ糠混入
 - III 7.5 YR 5/6 明褐色粘質土(旧表土)
 - 1 5 YR 4/6 赤褐色砂質土
 - 2 5 YR 4/6 赤褐色粘質土
 - 3 7.5 YR 5/6 明褐色土
 - 4 5 YR 4/8 赤褐色粘質土
 - 5 2.5 YR 5/8 明赤褐色粘質土
 - 6 5 YR 4/8 赤褐色粘質土
 - 7 7.5 YR 5/6 明褐色粘質土
 - 8 7.5 YR 3/4 明褐色粘質土
 - 9 5 YR 3/4 暗赤褐色土
 - 10 5 YR 2/2 暗赤褐色粘質土



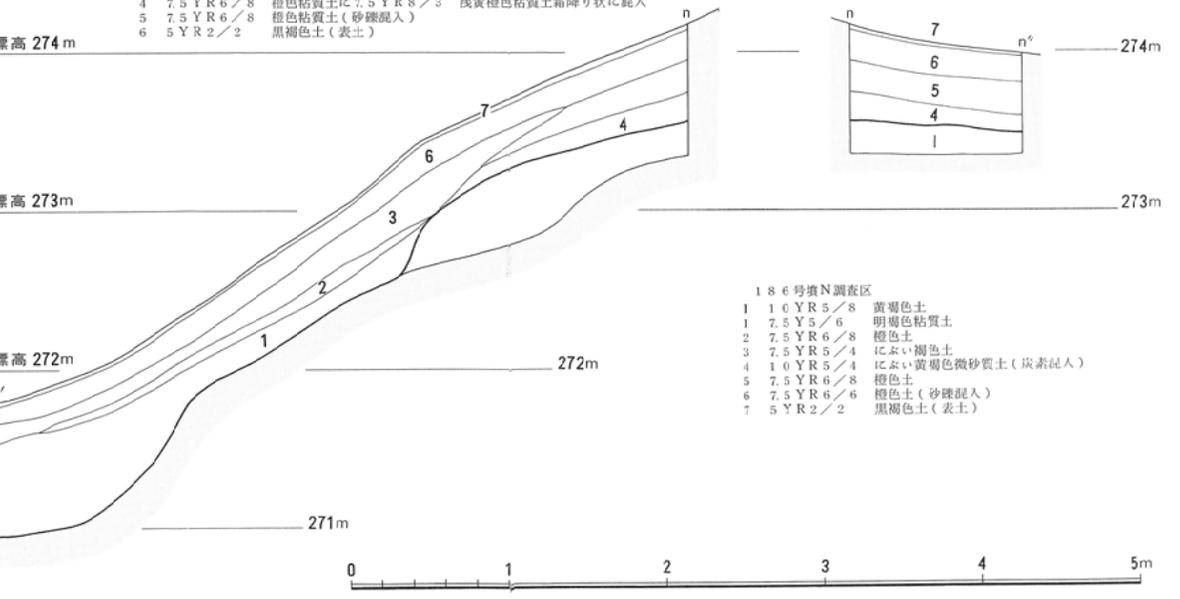
- 186号墳K調査区
- 1 10 YR 5/6 黄褐色粘質土(腐れ糠混入)
 - 1 10 YR 4/6 褐色粘質土(炭素混入)
 - 2 10 YR 2/3 黒褐色粘質土
 - 3 10 YR 4/4 褐色粘質土
 - 4 10 YR 5/4 におい黄褐色粘質土
 - 5 5 YR 2/2 黒褐色土(表土)



- 186号墳L調査区
- 1 7.5 YR 4/4 褐色微砂質土
 - 2 7.5 YR 4/4 褐色微砂質土に5 YR 6/8 褐色砂質土混入
 - 3 2.5 YR 7/6 明黄色砂質土
 - 4 2.5 YR 7/4 浅黄色微砂質土
 - 5 10 YR 7/4 におい黄褐色粘質土
 - 6 10 YR 5/4 におい黄褐色土
 - 7 5 YR 2/2 黒褐色土(表土)



- 186号墳M調査区
- I 7.5 YR 5/8 明褐色粘質土(旧表土)
 - II 7.5 YR 5/6 明褐色粘質土(旧表土)
 - III 7.5 YR 8/3 浅黄褐色粘質土(旧表土)
 - IV 5 YR 6/6 褐色粘質土に黒色砂混入(旧表土)
 - 1 7.5 YR 4/6 褐色粘質土(遺物出土層)
 - 2 7.5 YR 3/4 暗褐色粘質土に砂粒混入(炭素混入・遺物出土層)
 - 3 7.5 YR 4/3 褐色粘質土
 - 4 7.5 YR 6/8 褐色粘質土に7.5 YR 8/3 浅黄褐色粘質土霜降り状に混入
 - 5 7.5 YR 6/8 褐色粘質土(砂混入)
 - 6 5 YR 2/2 黒褐色土(表土)



- 186号墳N調査区
- 1 10 YR 5/8 黄褐色土
 - 1 7.5 YR 5/6 明褐色粘質土
 - 2 7.5 YR 6/8 褐色土
 - 3 7.5 YR 5/4 におい褐色土
 - 4 10 YR 5/4 におい黄褐色微砂質土(炭素混入)
 - 5 7.5 YR 6/8 褐色土
 - 6 7.5 YR 6/6 褐色土(砂混入)
 - 7 5 YR 2/2 黒褐色土(表土)

第5図 各調査区土層断面図

b, 105号墳

○調査区 第2図版

○調査区105号墳中央部に2m×2mのグリット掘りを行なったものである。表土を取り除くと5～10cmの浅く窪んだところが見られた。しかし、遺構は確認されない。この丘陵特有の腐れ礫が多量に出土した。この礫の中にはこわされた礫があり、表土下20cmまでは、盛り土や整地されたものと考えている。20cmをすぎると地山層となり、遺構遺物は、確認されなかった。

C, 186号墳

K～M調査区 第2・5図版

墳丘の中央部・西側・南側・東側の4か所にトレンチ調査区を設定したものである。

L調査区は、墳頂中央部を掘り下げたもので、古墳の盛り土状況を確認するために設定したものである。同L調査区は巾2m長さ4mを20cm～90cm掘り下げを行なった。しかし、掘り下げを行なっている時、墳麓部から土師器破片が出土したことから古墳と断定し、また、墳頂部の調査区は、松茸山で占有者の関係から調査区の拡張や掘り下げを中止し、また、墓壙保存等を考え埋め戻しを行なった。

K・N調査区は、東南部の墳麓線の確認のため設定したものである。両調査区の堆積土より土師器片が検出された。また、墳丘の角度変更する墳麓線をおさえることができた。N調査区の墳麓とおさえたところの表土下85cmの地山直上より検出した土師器片は、焼成前に穿孔された底部穿孔土器片の底部と頸部を検出することができた。しかし、巾1mと細いトレンチのことから口縁部及び体部等は検出していない。胆土には小砂粒を含み、焼成も比較的良く色調も赤褐色を呈している。穿孔部の孔の推定径は4～5cmと考えている。垂直近く立ち上がる頸部の長さは、4cmで内部口径11cmと推定できる。

N調査区は、186号墳南西の角にある土橋の調査区である。調査の結果この土橋は、古墳の周濠に墳丘の盛り土が崩されてできたものであることが最下層・地山直上から出土した土師器片より判断することができた。

Ⅳ ま と め

1. 古墳の形態・規模

下小松墳丘群には、194基の墳丘を発見し5支群に分けている。この5支群の1つ鷹待場支群には、31基の墳丘が確認され、方墳14基・円墳17基を数えるところである。その中でも最も大きな墳丘である円墳・方墳を今回の発掘調査対象としたものである。

a, 106号墳

墳丘南西の推測ラインをもとに円墳と考え調査を行なったものである。しかし、調査区より遺物の検出地点や墳麓線を確認した所などを考えた場合、古墳の北側のラインが直線をなし、この北側墳麓線には古墳築造後堆積した覆土は浅く反対側の南・東・西側は堆積した覆土が深い。この丘陵にある墳丘のほとんどは、南西側が崩れた形を成していることなど、これを考慮し、方墳と断定した。一辺東西24m南北19.5m高さは、4.4m土橋状のところを2.4mを測ることができた。盛土は、約1.4mを盛土し、この盛土を切って墓壙が造られている。周濠底部における標高差は、山側が高く谷側が低い作りである。

b, 105号墳

106号墳周濠の西側にある東西11.5m・南北7m・高さ約1mの方形の塚で、しっかりした盛土は行われていないようである。しかし、表土より20cm程の土は、整理等で攪乱されている。中央部4㎡を調査したが、遺物等はみられない。現在の墳形より106号墳の周濠に切られないことから、106号墳と同時か、後に造られたものと考えているが、正確に把握するには調査面積を拡張する必要がある。

c, 186号墳

鷹待場支群の造られた東側にのびる尾根の中で一段高く見晴らしの良い所に造られた方墳である。東西22m・南北23m高さは、土橋等もあることから2.4m～4.4mとなる。周濠の全体の調査を行なっているものではないが、106号墳同様な周濠で深さは一定ではなく、南側になるにしたがい低く深く造られている。また、墳形も東側が残り南西側が崩れている関係より、周濠の堆積した覆土も東側は、20cm～30cmで遺物が出土し西側においては80cm掘り下げを行なわなければならない。このことは、南西側に墳丘の盛土が、崩れたことを意味するものと理解している。

106・186号墳の方墳は、規模的にほぼ同様な造りであり、周濠の造りも雨水を考えたものと推察される。

2. 築造年代

鷹待場支群 106・186 号墳の築造年代を示すものは、遺構と遺物であろう。106 号墳は、主体部の掘り下げをしていないことから副葬品が確認されていない。周濠部より土師器片を検出しているが、小片のことから特定の器形をおさえることができないが、器表面に刷毛目調整のもつ大型の甕片等と推定している。しかし、正確な年代をおさえることのできる遺物とはいえない。築造年代をおさえる手がかりとして主体部の造り方や大きさから判断することができよう。106 号墳の主体部は、割竹形木棺直葬である。東北地方の割竹形木棺直葬として、山形 21 基・宮城 4 基・福島 8 基の 34 基が知られている。

山形県内で割竹形木棺直葬が、確認されているのは、山形市の衛守塚 2 号墳・お花山古墳群 17 基・川西町下小松古墳群小森山支群 3 基の 21 基である。しかも、これまで山形県で発見された割竹形木棺直葬の主体部の大きさは、3～5 m 以下のものであり 6 m 以上の掘り方をもつ主体部は、今回調査を行なった 106 号墳が初めてとなる。また、県内で調査された古墳の主体部の造りが、すべて地山層を掘り込んでいるものである。下小松古墳群小森山支群 61 号墳の主体部の造りも同様であった。しかし、鷹待場支群 106 号墳は、盛り土を掘り、主体部を設置するものである。この様な例は、山形県内で調査を行なった古墳には見られないものである。

東北地方において 106 号墳と同様に盛り土に墓壙を造る方墳は、宮城県宇賀崎 1 号墳・福島県愛谷古墳等と同規模といえるようであり、4 世紀後半～4 世紀末とおさえておきたい。

186 号墳においては、主体部を確認していない。しかし、各調査区より土師器片を確認している。器形の推定できる RP 60 底部穿孔土器より、築造年代を考察できよう。この土器は、4 世紀の塩釜式Ⅱ A～Ⅲの範疇におさえることができると考えている。東北地方の方形周溝墓及び古墳より発見された底部穿孔土器は、宮城県名取市今熊野 1 号方形周溝墓・宇賀崎 1 号墳・雷神山前方後円墳・仙台市安久東前方後円墳・遠見塚前方後円墳・古川市青塚古墳・宮崎町庚森円墳・山形県川西町天神森古墳の 8 基であり、これら 8 基の古墳は、4 世紀末～5 世紀初頭に考えられることから鷹待場支群 186 号墳も同様な時期と推定している。

3. 結 語

今回の調査により、下小松墳丘群 5 支群の内 2 支群の調査を行なったことになる。今年度の調査によって、下小松古墳群の規模は、昨年調査を行なった小森山支群 77 基に、鷹待場支群 31 基を加え 100 基以上を数えることになる。そのうちの幾つかの墳丘につい

ては、その築造年代について、今後調査をようするものが認められようが全体としては古墳時代の築造であると推察している。

特に鷹待場支群の方墳は、天神森古墳と同時期もしくは天神森古墳に次ぐと考えられ、これらの古墳築造後、小森山支群が造られたと推察している。

引用・参考文献

- 1985 法政大学「本屋敷古墳群の研究」
1985 山形県教育委員会「お花山古墳群の研究」山形県埋蔵文化財調査報告書
第85集



下小松墳丘群遠景



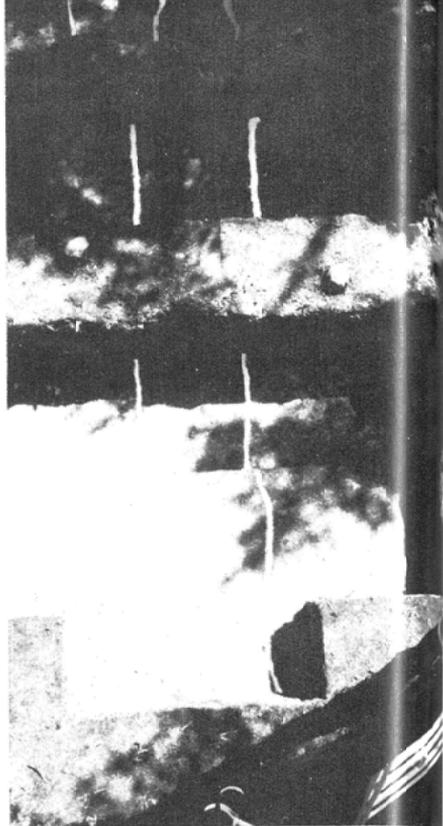
第106号墳周濠
調査前状況



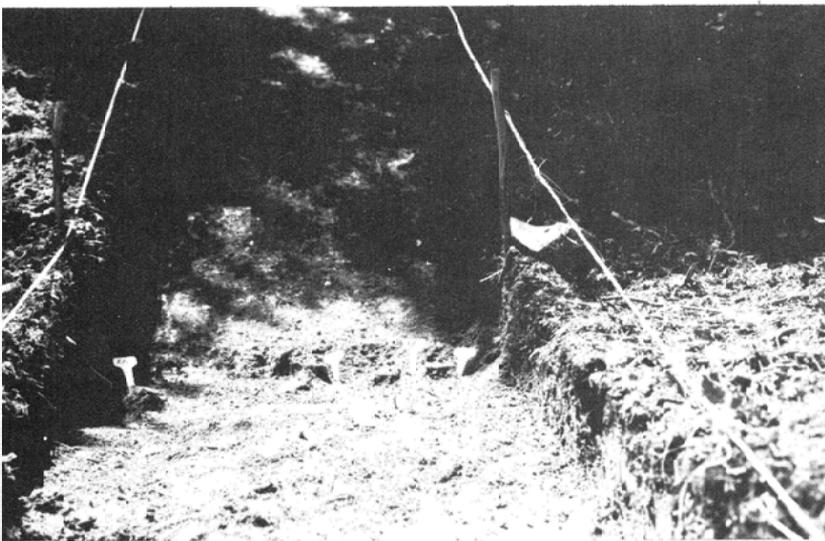
第106号墳
現地説明会風景



墓壇確認 (西より)

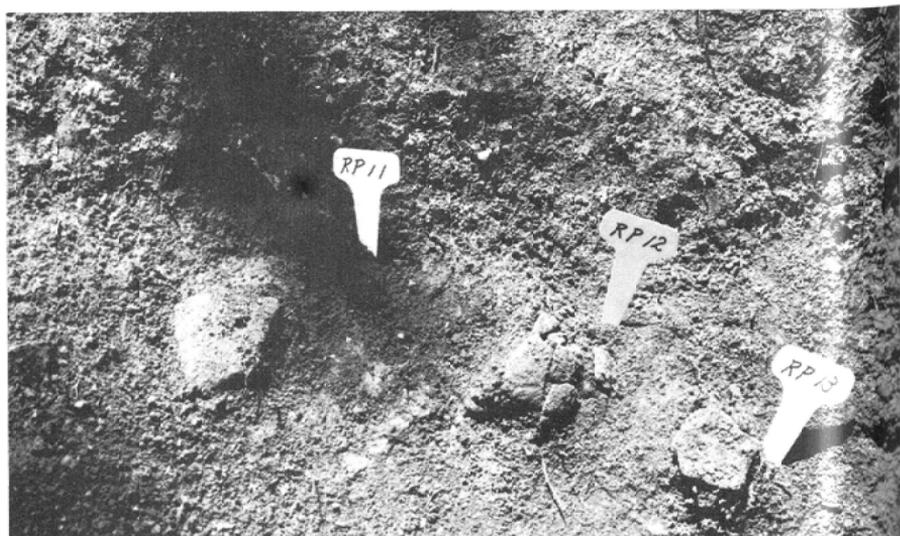


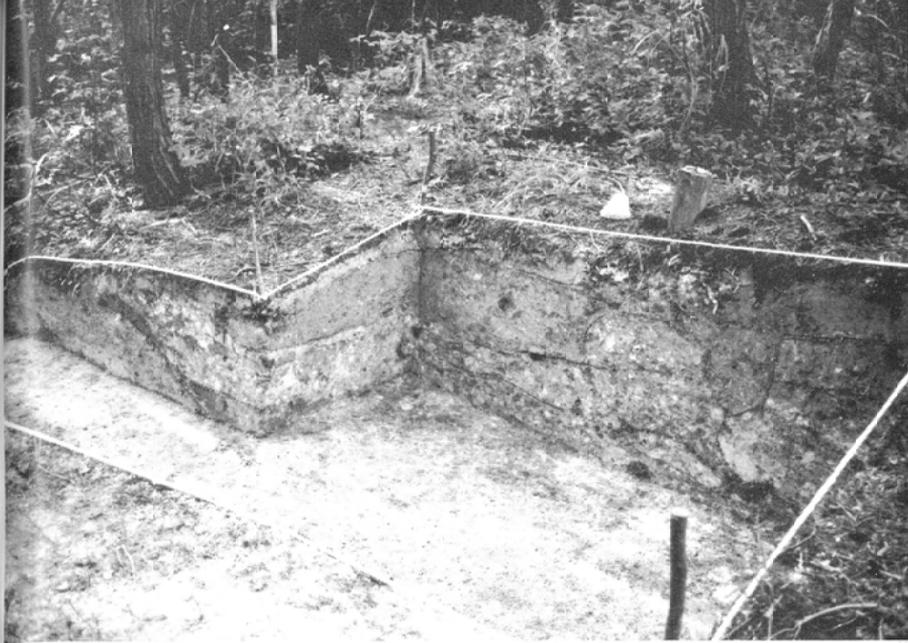
墓壇確認 (上より)



第 106 号墳 F 調査区

第 106 号墳 F 調査区
遺物出土状況





第 186 号墳



第 186 号墳

L 調査区 (東南より)



第 186 号墳

N 調査区 (東南より)

町 の 木



町 の 花



緑と愛と丘のあるまち

下小松墳丘群 鷹待場支群

第 105・106・186 号墳発掘調査報告書

昭和 62 年 3 月 1 日 印刷

昭和 62 年 3 月 15 日 発行

発行 川西町教育委員会社会教育課

印刷 ㈱ よねざわ 印刷